慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 残山剰水の記 |
| Sub Title | |
| Author | 森, 武之助(Mori, Takenosuke) |
| Publisher | 慶應義塾大学藝文学会 |
| Publication year | 1977 |
| Jtitle | 藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.36, (1977. 3) ,p.75- 83 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 森武之助教授退任記念論文集 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00360001-0075 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 残山剰水の記

森　武之助

ごうーという音と共に、とてつもない大きな力が家の外から突然、迫って来る気配をその一瞬感じた。と、その直後それは大震動に転じた。とっさに地震だと知るや、身を翻して一気に廊下を走りぬけ奥の客間に飛び込んだ。大地が揺れ動くという程度の感じではなかった。左右から上下から、家屋を捩じ伏せ捩じ曲げようとする狂乱の圧力が、息する暇もなく、大波のように畳み重って来て、建物をゆさぶり続けたのである。長押と柱の間が一寸二寸と口を開け、今にも外れるばかりに、捩じ曲げようとする力に喘ぎながら、ぎしめいている。何処からとも知らぬ土埃が目鼻のあたりへ流れて来る。反射的に口を尖らせて吹き払いながら突伏し続けた。と、眼前の夏の葭簀障子が外れ、向うむきに倒れて次の間が、ぽかりと開けた。その先にある奥庭が明るく見える。飛石に導かれて庭の奥にある大きな石灯籠が、ぐずぐずと崩れた。まるで干菓子を折ったような無抵抗な姿であった。左手にある土蔵の白壁に、くの字形のひび割れが走って、その割目も右へ左へと揺れ動きながら、忽ち傷口は広がって行く。こんな中で、判断も理知も失った人間は、唯恐怖のわめき声を挙げて平れ伏しているだけである。

時間にして二、三分もたった頃なのか、家屋の軋みも、揺れもぴたりと止った。誰もとっさに口をきく者はなかった。放心とは、こんな表情をいうのであろう。無意味に手を動かして土埃りを払い退けるような仕草をしていた。ふと気

が付くと、この奥の客間に家中の者が集っていたのである。安政の大地震の経験をもつ祖父母が、地震の時は必ずこの座敷に避難すること、慌てて外へ飛び出すのが一番危険であることを折にふれて家族の者に語っていたのが、とっさの今日に実行されたのであった。小さな揺れは頻ぱんに続いて襲って来たが、何の心の急変か、まったく恐ろしいと思わなくなっていた。私は一人家族の群から立上ると、ふらふら庭の方へ歩き出した。祖母の叱声が後から追って来たが、そのまま庭の真中に出て、空を見上げた。うすく濁った夏空には陽が粲々と輝いていて、あたりは静けさが支配していた。屏の外はどうなっているのか、全く解らぬが、物音も人声もないのである。あの一瞬前の大鳴動は何処へ行ったのか。それは夢であったとしか思えない、普段の暮しのリズムが醸し出す静けさが、広がっているのであった。その時突然、耳元で蟬が鳴き出した。眼前の庭木に止っていた一疋の大きな油蟬が、狂ったように鳴き出したのであった。――――――

これが私の遭遇した大正十二年九月の関東大地震の発端の姿であるが、これから続いて起った大火は、地震の被害を何十倍にも拡大し、東京を一面の焦土と化し、十数万の人命と莫大な財物を、一日に消滅させたのであった。この悲しみには比ぶべくもないが、同じくこの震災により、東京に残存し続けていた古い景物も一挙に消滅したのである。

今、この震災で消え去った旧いものの影が、走馬燈のように私の記憶の中で廻り始める。

その頃の私の周辺には、遠い江戸の香さえ、未だ微かながら残っていたのである。私の家に出入していた老いた植木屋がいた。鋏をならしているその傍で、ぼんやり立っている私に時々話かけて、相手になって呉れたことを憶えている。この年老いた植木屋は、かつて上野の山に篭った彰義隊士で、若手仲間の剱の使い手であったことを、或日、父から教えられた。私の眼に写ったこの幕臣は、いつも銜え煙管をした腰の低い柔和な植木職であった。又、この頃のこと、湯殿で身体を拭き終った手拭を、ばさっと振り下げて水をきる仕草を私はいつか覚えていた。或る日これを

祖父の眼前で行うと、激しい勢いで叱責された。私は唖然として、なんでこんなに叱正されるのか理解出来ず、べそをかいた。後で、祖母から、昔、打首の瞬間の音が手拭のばさっという音と同じなので、大変厭しい縁起の悪い仕草なのだと教えられた。私は霞に隔てられた江戸の打首の音を、子供心に深く感じ取ったのであった。

しかし、なんといっても江戸は遙かあなたの二、三の淡い影であったが、明治は私の身辺に密着して、数多く残存していた。

その一つとして、父に連れられて行った大川端の或る料理屋の二階から眺めた、夕暮の景を想い起すのである。そこからは向う岸の本所深川の町並が、未だ暮れきれぬ空明りに、はっきりと見渡された。眼下を悠々と流れる隅田川は上げ潮時らしく、濁った暗緑色の水は小波を立てて上流へ向って動いている。こちらの岸辺からボォーと太い気笛を鳴らして川蒸気が動き出した。銚子通いのこの蒸気船は旧式の外輪船で、両舷にある水車が白い波を蹴立てて、あたりの小舟を驚かせながら、ゆっくりと進んで行く。川端の道路を母衣をかけた人力車が連れて走って行く。二階の手摺のすぐ横の瓦斯燈に早く火が入った。その下がこの料理屋の勝手口らしく、そこに、青々と頭を剃りあげて、女柄の着物をきた幇間らしい男が、たすきがけの女中と立ち話をしている。遠くから山彦のように渡って来る雑多な音響は、両国橋あたりから流れて来るらしい。やがてこの辺りも、いつか一面の薄墨色の霧が忍び寄って来て、このまま夜の世界へ転じて行くのである。

私は後年、清親や芳年らの描いた明治の東京風景版画に接し、大川端夜景図が、まったく同じ情趣を湛えていることに驚くと共に、少年の頃私が見た赤煉瓦を敷きつめた銀座通りや、又、九段牛ヶ淵、上野不忍池周辺などには、未だ明治の名残がそのまま保たれていたことを改めて知ったのである。

同じ頃の思い出である。私は神田にあった母の里に、よく遊びに行った。その折、幾度か内部に入ってみたのが、

駿河台のニコライ聖堂であった。見慣れた日本のものとは、まったく様式の違うこの大建築は、少年の眼にはいつも新しい驚異であった。人気の無いドームの内部は白色の壁面で囲まれ、高い硝子窓からさす冷々とした外光が、鎮静の気を一層ひき立てていた。一段高い中央の祭壇にある十字架、左右の硝子箱の中にある金銀刺繍のギリシャ正教の司祭の袈裟や衣、聖笏、聖杯。これらによって構成されているこのドーム内の雰囲気は、少年には敬虔というより神秘的な畏怖感をかき立てるのであった。明治の名残をとどめる低い家並の続く屋敷町を圧して、独り聳え建つこの異国のドーム。それは、突然展開した異相の文明開化に、強い刺戟を受けた維新の人々の驚嘆と同じ類を、大正期の少年の心に刻み込んだのである。

私の瞼の裏に焼き付いたこの頃の風物は、小さな数枚の絵葉書に過ぎぬが、江戸が明治に変り、そして又、大正に移る間、数多くの懐しい景物が失われて行き、その時代の人々を如何に歎かせたことであろう。我国ばかりでなく、西欧の大都会でも、同じような歎きがあったであろう。が、その変化は、共に比較的に緩徐であったといえよう。大正十二年の大震災は、文字通り一挙に旧い東京を抹殺したのである。人々の追憶の舞台は、即日一片の煙と化したのである。勿論、この大震災の破壊したものは、都の風物ばかりではない。旧い社会構造や思想にも大きな影響を与えたのであるが、少年期に遭遇した私には、それらを体験的に考察し記述する資格がない。変化した社会思想や精神を感受する程、年令が成熟していなかったことと竝んで、私個人、大震災によって根本的な境遇の変化を受けなかったことも、特別な衝撃を記憶せずに終った原因であろう。

焦土と化した東京の街は、やがて直線的に整理されて再建の途に着いた。曲りくねった露地や、裏店の行き止り道は姿を消し、押せ押せながら家並は一応、道路に面して整列したのであるが、ばら蒔かれたマッチ箱が一列に竝んだというだけで、マッチ箱には何んの変りもなかったのである。唯、この群れの中に、復興建築と称するコンクリート

の三、四階建のビルが、ぽつりぽつり頭を出して来たのが眼に付き始めた。殊に、昭和期に入ってから際立って大きくなった建築物は、丸の内界隈の会社のビルと繁華街の百貨店の建物である。

古く十七世紀、談林派の一俳人は、湯女風呂の二階を遙か掠めて飛ぶ月面の雁を詠じている。伝統の情緒を捨てて、新しい景物を搦ませて生れた新鮮な都会情緒の発見である。それをそのまま学んだかのように、百貨店の屋上に昇る月輪に、新しい震災後の東京情緒を歌いあげた流行歌謡作者が、この頃現れている。江戸は勿論、明治大正の影の片鱗さえ失われたこの時に、唐突にも、元祿文化が顔を現わして来たような気がした。他の比較は知らず、両者共に猥雑さの一点だけは、確かに似ていたようである。

---

昭和二十年になると、日本の戦争も、いよいよ末期的様相を現わして来た。軍需工場攻撃から始った敵空軍の空襲は、今や防御力さえ失った日本軍を嘲けるように、毎夜、全国の都市へ無差別に焼夷弾の雨を降らせたのである。東京は昭和二十年三月、その下町の大半を空襲による火災で焼失し、十万余の人命が失われた。同じ五月、今度は残されていた山の手地区が狙われたのであった。その当夜、私は鎌倉の別宅にいた。

警戒警報のサイレンが鳴り終ってから五分間も過ぎたろうか、次て空襲警報のサイレンが鳴り響いた。ウォー、ウォーと波状に繰り返されるその音は、日本の国土が傷づいた獣と化して、身悶え訴える悲しい遠咆えのように、夜空に広がって行くのであった。こうなると、どうにも対応する処置など無いのだ。怒濤の如く押寄せて来る敵の火力に翻弄され、のたうち廻っていたのが、この頃の日本人であり、日本国家であったのだ。個の力など、どうにもならぬ。私の思考は中絶して、唯、時間が一刻一刻と過ぎることを全身に感じるだけであった。たぶん今夜の空襲は東京

であろうと、ぼんやり想いながら、暗い防空電球の下で、することもなく座っていた。

予想通り、その夜の空襲で東京の残部は、ほとんど全滅した。私の麹町の家も焼けたことを翌朝知った。そして二日程たって、私は家の焼跡を見に行くことにした。

どうにか通じている横須賀線に乗って、東京駅までは行ったが、さてその先の交通機関のあては無く、歩くより他はなかった。皇居の堀に沿って行くと、桜田門付近の官庁は全て焼け落ちていた。三宅坂の参謀本部、陸軍省も跡形も無かった。無傷の英国大使館の前のあたり、皇居の堀は鉛色の水を湛えて静まり返っている。何か白い鳥が向うの石垣に沿って泳いでいた。すぐ近い三番町の我家の跡に着くと、そこはコンクリートの土台の間に、無数の屋根瓦の破片が積っていただけであった。庭のあたりには焼夷弾の空の円筒が散乱し火熱で表面がハゼた御影石の石灯篭が赤茶けた姿で、ぽつんと立っているきりで、庭木は全て根元まで完全に燃え尽していた。暫らくして私は付近の坂の上に立って、あたりを眺めた。それは見渡す限り全て赤黒い焦土であった。その間をぬって道路が遠くへ延びているだけである。暗雲が低く垂れた空の下、小雨がぱらついて来た。この暗澹たる景を何んと形容したらよいのか。荒涼という語は、晩秋か冬枯の景をいうものに過ぎぬ。そんな季節の情趣の介入する余裕のない、今眺めているこの非情な廃墟を、何んと表現したらよいのか。私は過日の東京の焦熱地獄は幸いに見なかったが、今ここで業火に崩れた瓦礫の地獄を見たのである。そして、この底には人々の無限の怨恨が凝固しているのである。ふと気付くと、先刻から人っ子一人にも行き会わなかったことを改めて知った。この焦土には、訪れる目的一切が無くなっていたのである。私は頭を垂れて暮れ初めた堀端道を、再び東京駅に向って歩き出した。

私はその頃、異常な読書量を積み重ねていた。書物の種類は問わなかった。少しでも余裕の時間は、全て活字に眼をさらすことに費した。部厚い書を一気に読み終えて、白々と夜明けを迎える日が数日続いたこともあった。これ

が、旺盛な知識欲がさせる業でないことは自明である。どうにもならぬ日々から、一時でも脱れる為に、興味をそそらぬ書でも、私の学力では及ばない類の書でも、なんでも自分を鞭打って読み続けた。戦局が悪化するに従って、この傾向はますます酷くなった。時に酒が手に入ると、それを呷りながら、無二無三に読み進んだ。そして六月に入ると、鎌倉も空襲の対象都市になって来た。私は急いで家族を伊豆に疎開させた。そこで私には時折、家族を見廻りに出向く仕事が増えた。

疎開地は東海道線の三島から私鉄に乗換えて、その終点から又奥に在った。六月も末に近い頃、私の乗った列車が三島駅に着いたので、多くの乗客と一緒にホームに降り立った瞬間である。あたりのサイレンが一せいに鳴り響き出した。それは警戒警報の先ぶれのない、いきなり空襲を告げるものであった。向うのホームから、「退避」、「退避」と必死の声をしぼって警防団員が走って来る。狙われているのが駅であることを直覚した私達は、改札口に殺到して、目標も無く盲滅法に走り出した。男達はゲートル巻き姿であり、女は皆もんぺをはいて、背にも手にも大きな荷物を持っている。どちらへ走り去るのが安全なのか、全く判断のつかぬこの場で、私は引込線に竝んで建っている倉庫の端まで、やっと辿り着いた。その陰に身を潜めたと同時に、キーンという鋭い音と共に疾風に乗った黒い影が頭上を掠めて迫った。と見た一瞬、連続した轟音が四辺の空気を引き裂いた。敵の戦闘機の機銃掃射である。忽ち尖光の如く通り抜けた敵機は、遙か中空で反転するや、再び迫って来て銃弾が一列に客車に撃ち込まれるのが硝煙の中に見えた。しかし、この空襲はそれきりであった。アメリカの艦載機は大空のかなたに見る見る豆粒程の大きさに遠退き何処ともなく去って行った。まるで敵兵が、一寸いたずらをしたとしか思えないような仕方である。が、このいたずらは、その場にいた二人の人間の肉体を引き裂いてしまったのである。

一時間程後、やっと動き出した私鉄に乗って、私は無事に家族のいる所にやって来た。そこは細い川の両岸に湯宿

の竝んでいる山懐の温泉場であった。四囲は黒いまでの緑の山に囲まれ、頭上のみに明るい空が覗かれる地形であった。川は上流の水田の落し水でやや濁ってはいたが、微かに空の色を映して流れている。川の中央の浅瀬に野天風呂があって、湯に浸っている人の頭と、傍で女が洗濯しているのが見える。橋を渡ると、大きな禅寺があり、その石段を幼児と手をつれて、野の花を持った老人がゆるゆる登って行くのが見える。既に焦土と化した大都会、間もなく戦火が迫ろうとしている地方都市から来た者にとっては、なんという夢のような平和な景であろう。しかし、やがてはこの地も上陸して来る敵軍の砲弾に崩され、川は溢れ、竝み寄る老杉は裂かれてしまうのか。たぶんそうなるであろう。が、今のこの眼前の和やかな一片の風景は、幻ではない。この一刻は確かな存在なのだ。私は、それっきりしか考えの進まぬ頭と、空っぽな心をもって、頭上は大木の枝がうち交す川辺に腰を下して飽かず眺めていた。

この年の八月、戦争は日本の敗北で終った。この戦火の傷跡は、勿論関東大震災のそれと比ぶべくもなかった。大正十二年九月の自然の破壊力は、関東の一部を一瞬に薙き倒したに過ぎぬ。が、この戦争の暴力は、日本全国を隈なく荒廃させた。しかも自然の破壊力では、よく成さなかった旧い日本の組織の根底を、打砕いたのであった。

都会も地方も大困乱の渦に巻込まれた。衣食住は極度に逼迫して来た。自らその渦中に在った私は、今それらを記す興味は無い。むしろ記すべき興味は、一変した世に次々と浮び上って来た奇妙な人間の顔付である。

日本に進駐して来た連合軍総司令官を、これこそ日本の救世主であると称え、現代の神武天皇御東征であるとした論が出た。これは特に滑稽な一例であるが、事実あったのである。寄席芸人が立候補して、これからの政治は大衆のものである、常に大衆に接し、一番大衆をよく知っているのは自分であるから、政治の改革に当る能力は自分にある、と演説していた。かって神憑り的日本主義を説いていた者が、今こそ本当のことをいうが、実は自分は民主主義者であったのだ、と重々しい調子で告白していた。確かに世の大勢に抗することは非常に困難である。この告白男の哀れ

さも、この点で同情するに吝かではないが、次てこの男が、かねてからの自分の主義であった世界平和と人間尊重を日本の国是とする運動の先頭に立つ、と叫び出すに至ると同情は失せた。偽せ者の空虚な響きが耳にうるさい。しかし想えば政治家の叫び声は、今も余り変らぬようである。バルコニーからの演説は、この告白男と今日も大体、似ているような気がする。

関東大震災で、旧い東京は消滅した。その二十年後、第二次大戦の為、全国の都市のほとんどが壊滅した。それから又三十年が過ぎて、その間、日本の国土、風物は大きく移り変った。この頃の著しい特色の一つとして、日本中何処へ行っても都市が皆、同じ顔付になってしまったことである。関東のそれも関西のそれも、東北も九州も、一部分の写真を示されると識別しがたいのである。これと同じく、自然の姿も全国一様に、空も海も濁り、いずくの野も山も必ず削り取られた赤肌の傷跡を、どこかに見るようになってしまった。

この半世紀に起った天災や戦火による世の激変の中を生きて来たが、私の直接うけた体験は、或は微少であったともいえよう。地震による家屋の崩壊にも会わなかった。焼夷弾に身を焦されることもなかった。よくまあ逃れ得て来たと想う。逃れ得た因には個人の意志や判断などは、ほとんど関係が無いのだ。結局、想いは広く人間の宿命というような考えに至る。数ありや無しや。人生も末近くなり、幻と過ぎ去った昔を、今ここに振り返り終って、さて今日これから、何を望もうというのか。古い頃、世の移り変りを具さに見た鴨長明は、方丈記（一本）の終りに

「一期の楽みはうたたねの枕の上にきはまり、生涯の望みは折々の美景に残れり。」

と記している。

私の瞼の裏にだけ残っている、輝きを残して去って行った数々の美しい風物は、生涯、心の底から消ゆることはないであろうが、再びこの眼で見ることは、出来るわけもないのである。